

アラブ・イスラームの「騎士道」

——フルーシーヤの分析を中心に——

籠 田 のぞ実

はじめに

中世アラブ・イスラーム社会は、奴隷軍人を中心とした騎士（騎馬戦士）たちが戦力の主軸となった時代である。フルーシーヤ Furūsiya は騎士が体得すべきと考えられていた知識の集成であり、知識人や騎士を中心に受容された。それは主に馬に関する学問と騎馬戦闘の技術についての体系であった。一方騎士道は、中世ヨーロッパを起源とする騎士特有の気風と理解されてきた⁽¹⁾。12世紀以降に確立された騎士身分の隆盛とともに、騎士道は騎士に対する倫理・行動規範としての役割を与えられ、ヨーロッパ本土においては貴族社会を運営するための宮廷的・文化的価値観として、十字軍遠征などの戦役においては戦場の規律として作用した。中世ヨーロッパ史を考える際、騎士道は文化史的にも社会史的にも重要な要素の一側面であり、その認識は研究者間でも一定の共有がなされている。それは西欧のイスラーム史研究者にも言えることであり、騎士が重視された中世アラブ・イスラーム社会にも騎士道が存在していたとする見解は比較的古くから認められる。特にフトゥワ Futūwa というアラブの美徳は、本来若者らしさという概念が適当なのだが、あえて騎士道と解釈される傾向にあった⁽²⁾。本稿のテーマであるフルーシーヤも、アラビア語の馬 Faras からの派生語であり、騎士 Fāris に必要な要素だと考えられていたことから、フトゥワと同様に騎士道と認識されている⁽³⁾。

しかし、A. N. ポリアクがフルーシーヤに対し「騎士道というよりは、身体的文化と定義されうる」⁽⁴⁾と言及しているように、その内実は西欧の騎士道とは様相を異にしており、より実践的・技術的な学問分野であることがわかる。また、フルーシーヤ訓練が盛んになったマムルーク朝においては、スルタンの政策によって訓練が廃止、復興されるなど、王権とのかかわりも見ることができる。

本稿では、学問分野としてのフルーシーヤとその担い手の変遷、具体的な鍛錬という側面からフルーシーヤの実像に対して論考をすすめ、中世アラブ・イスラーム社会においてフルーシーヤが発展した背景にも言及を試みる。そのことにより、フルーシーヤがどのような分野であり中世アラブ・イスラーム社会、とりわけ最も盛んになったマムルーク朝においてどのような役割を与えられていたのかを明らかにする。なお、本稿でのアラビア語転写は平凡社『新イスラム事典』

の表記法に従う。

フルーシーヤ諸学とその担い手の変遷

フルーシーヤという語彙が、ひとつの学問分野の呼称として使われるようになるのはヒジュラ暦2世紀／西暦8世紀の後半、アッバース朝期のイラクであったと考えられている。さらに3／9世紀の間に広く普及し、概念的な骨組みが構築された⁽⁵⁾。

フルーシーヤという語が網羅する活動は多岐にわたっており、主に以下のような分野を包括している。各種戦闘ジャンルの技術、訓練について（槍術、弓術、剣術、鎚矛、接近戦など）、狩猟、ポロなどの騎士の嗜みに関すること。武器の種類と特性、武具の取扱いなどの実用的な知識。戦法、戦略などの軍事的な専門領域。そして馬術、蹄鉄術、獣医学の基礎などである。それぞれの委細については後述することとするが、これら騎士が接触する多様な分野を総括して、フルーシーヤ諸学と呼称する。アラビア語では funūn al-Furūsiya や anwā' al-Furūsiya などと部門、分野、学問といった語彙と併せて表わされることが多い。フルーシーヤは後のマムルーク朝においてマムルーク騎士の教養を身につけるための必須条件として会得の対象となり、kamālāt 才芸、教養や fadā'il 美德、優れた品格と呼称されることもあった⁽⁶⁾。

アッバース朝からマムルーク朝にかけて軍人層に浸透したフルーシーヤであるが、その始祖とも言うべき人物がイブン・アヒー・ヒザーム Ibn Akhī Hizām として知られるムハンマド・イブン・ヤウクブ・イブン・ガーリブ・イブン・アリー・フッターリー Muḥammad ibn Ya'qūb ibn Ghālib ibn 'Alī al-Khuttālī である。彼はバグダードの生まれで、ヒジュラ暦3世紀／西暦9世紀の後半頃に没した人物である。彼の一家はアッバース王家に古くから仕える名家⁽⁷⁾であり、おじのヒザーム・イブン・ガーリブ Hizām ibn Ghālib はホラーサーン軍の司令官であるとともにカリフ・ムータシム al-Mu'taṣim（在位833-842）の馬術の師でもあった。ヒザームの兄弟である彼の父ヤウクブ Ya'qūb もカリフ・ムタワッキル al-Mutawakkil（在位847-861）の獣医長を務めているが、ヒザームの名声が大きかったため、一貫してヒザームの兄弟として扱われた。そのために、彼の息子のシュフラ（あだ名）はイブン・アヒー・ヒザームなのである。彼は馬に対する詳細な知識や馬上での軍事訓練などを身につけるにあたって理想的な環境で育った。彼が彼のおじや父親の足跡を辿り、ホラーサーン軍の司令官になったのは必然的なことであったといえよう。更に彼はカリフ・ムータディド（在位892-902）の獣医長を務めるに至った⁽⁸⁾。イブン・アル＝ナディーム Ibn al-Nadīm によると、彼の作品や著作はカリフ・アル＝ムタワッキルに捧げられており、騎士に向けたマニュアルと将校や司令官に向けたマニュアルという相互補完性のあるふたつの専門書によってなっていた⁽⁹⁾。

この時イブン・アヒー・ヒザーム記した書物は散佚して現存しないが、後世の知識人たちの引用によって、その一部を知ることができる。第一のマニュアルには馬術、獣医学、蹄鉄術など馬

に関係する広域な知識が収録されている。一方第二のマニュアルには騎馬、制馬術、剣術、槍術、弓術、武具について、ポロに関する技術が収録されている。これらは後世分割され、異なる作品と認識されるなどの混乱もみられるが、一般的には『フルーシーヤと獣医学の書』*Kitāb al-Furūsiya wa-al-Bayṭarah* として扱われる。

イブン・アヒー・ヒザームの死後、彼の作品はマムルーク騎士、ハルカ（非マムルーク）騎士たちにとって特に優れたマニュアル（軍事手引き書）として受容された。アッバース朝後期にかけて、実体験を基にしたフルーシーヤ専門書が記される風潮も現れた。しかし、基本的にはこの頃のフルーシーヤは帝王学としての性格が色濃かった。アッバース朝期のフルーシーヤは、ササン朝宮廷や地方の習慣・伝統・慣行から影響を受けており、あえて言うならば、西欧の「王の鑑」に対応するものと考察できる。具体的な教えとしては、アッバース王家の子息と、貴族の息子たちに対する宮廷的な振る舞い、武具の扱い、弓術、ポロ、狩猟という分野における幼少期からの訓練を促すものであった⁽¹⁰⁾。

このように当初は宮廷上層部の帝王学として扱われていた学問が、社会構成員の変化によって軍事マニュアルとしての性格を獲得していくのである。その契機のひとつがギルマーン騎士をはじめとする外来騎士勢力の台頭であった。8代カリフ・ムータシム al-Mu'taṣim（在位833-842）は現存のホラーサーン軍団をはじめとする部族的な軍隊に代わってトルコ部族出身の新兵募集に力を入れ、ギルマーン *ghilmān* という新しい軍事組織の体制を整えた。ギルマーンはグラーム *ghulām* の複数形であり、原義は「少年」を指す。グラームとは一般的に従僕の一形態であり、その多くは奴隸身分であったが、9世紀以降は大規模な奴隸軍団を指す語としても使われるようになる⁽¹¹⁾。後世にマムルークと呼称されるようになるギルマーン騎士達は、ホラーサーン軍の実践していた軍事訓練を大いに取り入れ、フルーシーヤの担い手としての地位を継承してく。

ギルマーン騎士は確かにトルコ系奴隸が多数を占めていたが、中央アジアの諸々の部族出身者を包括していた。むしろ為政者にとって、強力な軍事力を保持する奴隸部隊が単一的な部族によって構成されることは望ましくならぬ事態であった。何故ならば、良くも悪くも意思の疎通が容易である状況は、自発的な意思や行動の発現に直結する傾向にあるからである。時代は下るが、セルジューク朝の宰相ニザーム・アル・ムルク *Nizām al-Mulk*（1018-92）も軍隊の構成に関して次のように記している。「もし、軍隊が同じひとつの部族であったなら、それは大変危険なことである。彼等は熱意に欠け、命令に背きがちになる。別々の種族にすべきことは至極当然のことである」⁽¹²⁾

このような理由から、アッバース朝におけるギルマーン軍団も、様々な出自を持つ奴隸軍人で構成されていたと考えることが妥当である。実際に軍事的なフルーシーヤ訓練の手法には、様々な地域の伝統を見出すことができる。すなわちアラブ、ペルシア、中央アジア、そしてビザンツの軍事的伝統がフルーシーヤ訓練に総括され、活かされているのである。熟練した射手の養成は

ギルマン軍団でのフルーシーヤ訓練において、重要視されていた。また、接近戦に備えて槍と接近戦に適した武器を同時に扱う訓練も受けた。この場合、ギルマン軍団が対峙する頻度が高かったのは中央アジアの遊牧民であったため、少なくとも騎馬戦闘を得意とする彼等と対等の、またはそれ以上の技量を身につけることが必須であった。さらに馬がない場合、あるいは戦場において降馬の必要に迫られた場合の戦闘も想定され、それに即した徒歩での訓練が課せられた⁽¹³⁾。

これらの実践的な訓練のほかに、獣医学の基礎と、騎士、歩兵、包囲戦と異なった状況下で使用する武器の種類や特性にも親しむよう求められた。加えて軍略と戦術の知識を身につけなければならなかったが、これらのフルーシーヤの課題がすべてのギルマン騎士に課せられていたかは検討の余地がある。この点に関しては、アッバース朝以降のマムルーク騎士にも同様に言えることであるが、彼等とはもともとアラビア語を母語とする出自ではなかった。グラームとして購入されてから教育を施される機会がある者もいたが、イブン・アヒー・ヒザーム以降記されることとなるフルーシーヤマニュアルを独学する機会や能力に恵まれる者は極わずかだったと考えるのが自然である。

アッバース朝後期からアイユブ朝にかけて、次第にその勢力をのばしたマムルークは、ついに覇権を手中に収めることとなる。西暦1250年にひらかれたマムルーク朝は、王朝を支える構成員としてのマムルークに関し、軍隊制度の整備や購入後の教育などの体系を整えた。このことによって、マムルークの安定した補填と供給が可能になった。というのは、マムルークは白人奴隷を示す語彙であるが、基本的にその隷属は一代に限られていた。つまり、マムルークとして購入された騎士の子供 (awlad al-nās) は自由民となってしまうことが多かったということである。これは、イスラーム社会の伝統的な奴隷制度に基づいており、生まれてくる子供の身分は母親のそれに従うという特性や、主人が認めて解放すれば自由人と同等の身分になることができるといった特性から起こり得るものであった。そのため、軍力の維持は世襲的なものではなく、体系的な軍隊構成や訓練方法が整備された上で、マムルーク騎士の養成がシステムティックに行われるようになった。もちろんその一要素としてフルーシーヤが果たす役割は非常に大きく、大量のフルーシーヤマニュアルが量産されるようになるのも、この時代である。

では、購入されたマムルークが一人前の騎士になるために課せられる訓練とは具体的にどのようなものであろうか。スルタン・バイバルス Baybars (在位1260-77) の治世以降、カイロに建設されたマムルーク騎士養成のための軍事学校がその主な役割を果たすこととなった。まず、マムルーク達はムスリムとしての一般教養を身につけることを求められた。彼等の大半はアラブ文化圏の出身ではないために、アラビア語の読み書きが不自由であり、往々にしてクルアーンを知らない者も少なからず存在していた。そこで、いちムスリムとして問題のない立ち居振る舞いが出来るように、基本的な教養の授業が開かれた。ここで注目したいのが、この教養という分野が必ずしもフルーシーヤと無関係ではないという点である。フルーシーヤを思想的見地から著した

イブン・カイイム・アル＝ジャウズィーヤ Ibn al-Qayyim al-Jawziya はその作品の中で、「ふたつのフルーシーヤ」について言及している。ひとつは「知識と弁証のフルーシーヤ」であり、もうひとつは「射撃と攻撃のフルーシーヤ」である⁽¹⁴⁾。後者はフルーシーヤにとって重要なものであることは想像に難くないが、知識とそれに基づく明瞭な弁証がフルーシーヤのもうひとつの構成要素であるという認識は、フルーシーヤが必ずしも技術的なもののみに帰結するわけではないことを表している。購入されたマムルークにイスラーム的な教育を施すことで、出世した際の官僚としての能力を萌芽させるだけでなく、王朝への忠誠心を植え付ける目的も充分にあったと考えることができる。もちろん、騎士としての技術的な指導はより厳しく課せられた。弓術、槍術、剣術などの基本的な武器の訓練はもちろん、ポロなどの騎乗球技もその項目に含まれていた。この軍事学校の卒業後、彼等は自由人としての地位を与えられ⁽¹⁵⁾それぞれマムルーク部隊に配属されるようになるが、配属後も軍事的なフルーシーヤ訓練は日常的に行われていた。

軍事訓練と同様に、フルーシーヤの書が盛んに書かれるようになるのはマムルーク朝期に入ってからであり、数量も内容も飛躍的に増加することとなる。研究対象としてのフルーシーヤの書を整理するにあたって、サッラーフはマムルーク朝期に普及するフルーシーヤの書について以下のような分類方法を採用している⁽¹⁶⁾。

- ①実体験に基づいたオリジナル作品。マムルーク朝初期までの時代に記された軍事書であり、現存数は非常に少ない。
- ②上記①やマムルーク朝以前に記された作品を基に書かれたもの。典拠が明確になっており、散佚した①の史料内容も含むため史料としての価値も高い。マムルーク朝初期から中期にかけて記されることが多い。
- ③マムルーク朝中期から末期にかけて記されたもの。①と②から部分的に拾い上げアレンジを加えた内容が多く、信憑性に欠ける情報が大多数を占めている。引用もとの史料や著者名を省略もしくは意図的に改編しており、内容も改悪が目立つ。これは写字生、編集者、本屋など製本に関わる職種が社会の需要に応えるかたちでフルーシーヤマニュアルを量産した結果と考えられる。

上記の分類方法が果たして有効かという点は実際の史料の検討が必要であるが、少なくとも記された時代に応じてマニュアルの内容に変遷があり、古いほど実体験に基づいた詳細かつ具体的な専門知識が記されているという傾向は見取することができる。今回実際に史料として検討したのは上記分類方法でいうと②に属しているものである。引用の典拠がはっきりとしており、フルーシーヤに関する専門知識やそれに纏わる史実などを知ることができるアラビア語史料である。主なものとしては、下記の年代記とマニュアルを組み合わせて検討することでフルーシーヤの諸

相を明確にしていく。

イブン・タグリービルディー Ibn Taghrībīrdī, Abu al-Maḥāsīn Jamāl al-Dīn Yūsuf 著：*al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wal-Qāhira*『輝く星』（以降 *Nujūm*）。年代記。イブン・タグリービルディーは、ヒジュラ暦812年／西暦1409-1410年頃カイロに生まれた。父親は有力なマムルークでダマスクスのナーイブも務めている。フルーシーヤの技術に関してはアミール・アクブガー・アル＝ティムラージー Amīr Akbughā al-Timrāzī に師事したとされる。自らもフルーシーヤに通じ、特に槍術、弓術、ポロに優れていたと言われる。ヒジュラ暦874年ズール・ヒッジャ月5日／西暦1470年6月5日没⁽¹⁷⁾。

Nujūm はヒジュラ暦20年／西暦641年から彼の時代に至るまでのエジプト史をまとめた年代記である。年代記という性格上、フルーシーヤの技術的なマニュアルとは一線を画しているが、マムルーク朝初期から中期にかけてのフルーシーヤ訓練の動向が細部まで記載されており、当時の実際の訓練様式などを知る上で有効な資料となり得る。特に、バイバルス1世の治世を頂点に隆盛を見せた競技場の建設の様子や、訓練においてスルタンが果たした役割など、フルーシーヤとスルトンの覇権が密接に関係していた事実を読み取ることができる。*Nujūm* ではマムルーク朝初期に興ったフルーシーヤの最盛を記述するとともに、その後の衰退の様相をも描いており、フルーシーヤのその後を論考する上で重要な証言となる。

ムハンマド・アル＝アクサライー Muhammad al-Aqsarāī, ibn Ismā'īl al-anafī 著：*Nihāyat al-Su'l wal-Umnīya fī 'Ilm al-Furūsiya*。『フルーシーヤの知識における議論と探求の極み』（以降 *Nihāyat al-Su'l*）。マニュアル。没年ヒジュラ暦749年／西暦1348年。ダマスクスで人生のほとんどを過ごしたこと以外はよく分かっていない。槍術の達人ナジュム・アッディーン・アル＝アフダブ Najm al-Dīn al-Aḥḍab に師事し、槍術を修め、弓術においても熟練者であったとされている⁽¹⁸⁾。

12章の分野別構成からなる本書はフルーシーヤ習得に必要な具体的技術や訓練方法について詳細に記されている。また、挿絵が多用されていることも特徴的で、現存している複数の写本においても着色された美しいイラストレーションを見ることができる。挿絵に関しては複写された年代に応じて服飾の文化的差異が見受けられるものの、当時の具体的な武具、武器、道具の形態を知る上で有効である。このマニュアルの写本は少なくとも10点現存しており、マニュアルとして重要視されていたと考えることができるため、初めに検討する史料として選出した⁽¹⁹⁾。全編をとらえてフルーシーヤに不可欠である分野が網羅されている内容であるため、最終的には本書を隈なく読み込み、整理検討することでフルーシーヤの具体的な内実を明瞭にする必要があると考えている。

これらの史料を含め、14、15世紀には多くのフルーシーヤの書が記されるようになった。その

中には明らかな粗悪品も含まれていたが、フルーシーヤの書急増の背景には、騎士たちによる需要があったと考えることが自然である。

しかし、年代記の記述と照らし合わせてみると、フルーシーヤの書が量産されることとフルーシーヤ訓練が盛んに行われることとは必ずしも一致していないことがわかる。後述するが、フルーシーヤ訓練が最も盛んだったのは、マムルーク朝初期から中期にかけてのことであった。フルーシーヤの書の増加は、その知識の欠如を補完するための手段と考えることができる。マムルーク朝滅亡以降、フルーシーヤが有名無実化し、アラブ諸学の主流から脱落していくことから、フルーシーヤにとってマムルーク朝は転換期であったと考えることができる。

フルーシーヤの具体的な鍛錬

では、フルーシーヤを極めるために、具体的にはどのような訓練が行われていたのであろうか。フルーシーヤという分野は非常に広域にわたるものであるが、その代表的なものを列挙すると以下のようになる。槍試合 *la'b al-rumḥ*, *thaqāfat al-rumḥ*, *thaqāfa*, *thiqaf*、ボロ *la'b al-kura*, *al-ḍarb bi'l-kura*, *la'b al-ṣawladjān*、カバクゲーム *Qabak*、弓術 *ramy al-nushshāb*, *al-ramy bi'l-nushshāb*、フェンシング *al-ḍarb bi'l-sayf*, *ḍarb al-sayf*、ビルドジャーズゲーム *sawq al-birdjās*、鎚矛試合 *fann al-dabbūs*、レスリング *ṣirā'*、マフミル行進に伴う槍のパフォーマンス *sawq al-maḥmil*⁽²⁰⁾、狩猟 *ṣayd*、石弓射撃 *al-ramy bi'l-bunduq*、競馬 *sibāq al-khayl* など⁽²¹⁾。その中でも特に重要視されていた槍術と弓術などの諸相を紹介する。

槍術

マムルーク朝期のフルーシーヤ訓練において、最も重要とみなされていた槍訓練は、スルタン・バイバルスがヒジュラ暦666年／西暦1267–8年にアル＝カバク競技場 *Maydān al-qabaq*⁽²²⁾を建設した年に大規模に導入された。この競技場は黒の競技場 *al-Maydān al-Aswad*、祝宴の競技場 *al-Maydān al-Īd*、緑の競技場 *al-Maydān al-Akhḍr*、レースの競技場 *al-Maydān al-Sibāk* などとも呼ばれ、後にスルタン軍がフルーシーヤを訓練するための中央施設として機能するようになった⁽²³⁾。この頃の槍訓練は黎明期にあり、改良の余地が残されていた。イブン・タグリービルディーによると、槍訓練において、多くの改良を取り入れたのはスルタン・カラーウン *qalāūn*（在位1279–90年）のマムルーク達であり、イブン・タグリービルディーの時代にまで続く槍訓練の源流は彼等に求めることができると述べている。更に、これらの訓練は改良が続けられ、イブン・タグリービルディーが *Nujūm* を著した15世紀半ばには、前100年のものとは槍の握り方やマナーのみならず、ほとんどの所作が全く違うものへと変化していた⁽²⁴⁾。これらの改良を加えたのは、マムルークの中でもランス・マスター（槍の達人）*mu'allimū al-rumḥ* と呼ばれる熟練者達であった。

槍訓練は実戦での戦い方を身につけるものと、マフミル行進でのパフォーマンスを練習するものとがあった。ここでマフミル行進といっているものは、年2回カイロの路上を周回する年間行事で、どの時もラジャブ月とシャウワール月中旬の月曜日と火曜日に行われるのが通例であった。マフミル行進は、巡礼団を送り出すカイロをあげての大行事であり、マッカ巡礼が安全に行われる環境を整えることが義務であると考えられていたスルタンにとってもその權威を誇示するのに必要なものであった⁽²⁵⁾。その内容とは以下のようなものである。

行進が行われる3日前には道沿いの店舗には装飾を施すように指令が下る。行進前夜、マフミルと行進の参加者は勝利の門 *Bāb al-Naṣr* で夜を明かす。翌朝にマフミルは勝利の門からシタデルへ向けて出発するのであるが、マフミルに続く貴顕の人々の後に高位のマムルークから選出された槍手が騎馬で続くことになっていた。槍手自らは鉄の鎧をまとい、その上から染色した赤い絹で覆い、彼等の馬もまたスチールの馬飾り *barkustuwānāt* とチークストラップを付けており、さながら戦着のような出で立ちである。これらのマムルーク達は実戦で使われる王家の紋章付きの軍旗を結わえた槍を手になっている。この行進に参加する槍手の数は総じて40名で彼等は突き刺す者という意味の *al-rammāḥa* と呼ばれ、彼等の司令官はマスターやチーフを表す *mu'allim al-rammāḥa*, *bāsh al-rammāḥa*, *bāsh al-Maḥmil* もしくは *mu'allim al-Maḥmil* と呼ばれ、彼の階級は1000人隊長（百人長）に匹敵した。また、司令官は *bāshāt* と呼ばれる4人の副官を従えている。この副官達は10人長相当の階級であり、10名の槍手の司令官である⁽²⁶⁾。マフミル行進のためのトレーニングはそれに先立つ40日間に朝と夕の2回行われる。無事に行進が終わった際には司令官と副官には名誉のロープ *khila* が与えられた。また、槍訓練とは無関係であるが、特筆すべきマフミル行進の恒例行事として「マフミルの悪魔 *'afārit*」に触れておきたい。これは、スルタン直属のマムルーク達がコミカルな盛装やぎょつとするような「道化師」の衣装を着せられるものであった。その道化師の衣装は市民たちの費用で作成され、種々のいたずらで趣向が凝らされていた。彼等は日没とともにそれらの衣装を脱ぎ棄てることが許されたが、行進の最中は道化であることを強いられた。このように、マフミル行進は一種お祭りの様相を呈しており、市民たちの娯楽でもあったようである。

マフミル行進はスルトンの權威を誇示するためにも有効なパフォーマンスであったが、しばしばその候補の選出には困難がともなった。何故ならば、*al-rammāḥa* に選抜されるマムルークは一定基準以上の優れた槍手である必要があった上に、マムルーク朝を取り巻く環境は常に平和とは限らず、戦時においては、彼等は必要な戦力となり得たからである。そしてついに、このマフミル行進における槍のパフォーマンスへの関心の低下や参加者のスキャンダルといった要因からスルタン・ジャクマク *Djākmak*（在位1438-53年）の治世において、廃止されるに至った。この廃止はカイロの人々に大きな悲しみをもたらし、スルタンへの非難というかたちで抗議された⁽²⁷⁾。それを復活させたのがスルタン・カーンスーフ・アル＝ガウリー *Kānsuh al-Ghawrī*（在位1501-

16年)であり、これは彼の威光を非常に高める結果となった。この際に多少の改変が加えられ、よりスルタンの権力を誇示する行事として、マムルーク朝の最末期まで滞ることなく継承されていく。このように、スルタンの紋章が刺繍された軍旗を結び付けた槍を抱えた、壮麗な40名のマムルーク騎士によるマフミル行進は、スルタンの権威を視覚的に表すものとして、政治的利用価値の高いものであったことが想像できる。具体的なその内容であるが、従者の少年達が軽業を披露する様子などはわかるものの、槍手達の訓練内容までは現時点で明らかにできなかった。マフミル行進における槍パフォーマンスの訓練に関しては、今後史料をとおして明確にする必要がある。

一方で、一般的な槍訓練の様子としては以下のようなものが伝えられている。それぞれの敵対する騎馬チームがそれぞれ向かい合った二つの列に陣取り、列の先頭、右側にそれぞれの隊のマスターが騎馬する。そしてこのふたりのマスターがまず陣営から進み出て、お互いに闘う、次に彼等の副官が、そして各グループの一番弟子が、という具合に向かい合った陣営の最後の弟子までそれが続けられる、というものである。この訓練はスルタン・ムアイヤド・シャイフ al-Mu'ayyad shaykh (在位1412-21年)の治世まで、どんな時であろうとスルタンが出席しなければならない訓練として慣行されていた。同スルタンは毎週月曜日と土曜日にこの訓練を行うように命じている。通常これらの訓練は、対抗といった意味合いの *khiṣmāniya*、*mukhāṣama* と呼ばれた⁽²⁸⁾。このように、フルーシーヤ訓練においてスルタンの参加が頻繁に確認できるのはこの槍訓練と後述するポロであることから、より政治と密接に結びついていたのが槍訓練であったと推測することができる。

弓術

槍術と並んで盛んに訓練の対象となったのが弓術であった。サッラーフは弓術について、フルーシーヤ諸学において豊富な部門を持ち、現存するフルーシーヤ写本の総数の1/3にもあたる数の複写が保存されていると述べている⁽²⁹⁾。その上で弓術は極めて研究の困難な、複雑さを包含した分野であると強調している。なぜならば、フルーシーヤ諸学として最重要視されていたがゆえにその絶対数が圧倒的に多く、需要も一定数あったことから商業目的での改悪的な複写も多数存在しているからである。さらに、弓術文学において通常語られるアラブ・イスラーム弓術は、専ら複合弓(コンボジット・ボウ)⁽³⁰⁾の使用に基づいていたが、これは他の文学において、必ずしも一般的ではなかったという点も挙げることができる。フルーシーヤ文学以外の弓についての記述に関して、文献学的な作品も伝統的なアラビア詩もハディースにおいても弓と記されているのはシンプルな木製の単弓⁽³¹⁾を指している。これが本来の伝統的なアラブの弓であり、前、初期イスラーム時代において使用された唯一の手弓のタイプであった。フルーシーヤの出現と、それにともなう戦力の追及により、厄介なことに、伝統的に単弓に使われていた弓を表すほすべ

での呼称が複合弓にも使われるようになった。フルーシーヤ文学の弓術に関する専門書において、断り書きなく弓 qaws と言及されているのは、複合弓に他ならない⁽³²⁾。単弓と複合弓、両者間の混同はフルーシーヤ文学における弓術の理解を妨げる大きな要因であった。本稿においては弓、弓術を扱う場合、複合弓を指すこととする。

実際にマニュアルとして後世に継承される弓術の基礎的なテキストは、8世紀後半から10世紀後半にかけて、実体験をもとに記された。このアッバース朝における弓術は、約10名の達人、「弓のイマーム達 a'immat al-ramy」によって創設されたと考えられている。文献によって弓のイマーム達の選出方法にはバラつきが見られるものの、以下の人物達は概ね弓のイマームとして列挙されている。すなわち、アブー・ハーシム・アル＝バーワルディー Abū Hashim al-Bāwardī、ターヒル・アル＝バルヒー Ṭāhir al-Balkhī、イシャーク・アル＝ラッファアー Ishāq al-Raffā', アブー・アル＝ハサン アル＝カーガディー Abū al-Ḥasan al-Kāghadī、そしてアブー・アル＝ファス・サイード・イブン・ハフィーフ・アル＝サマルカンディー Abū al-Fath Sa'īd Ibn Khafif al-Samarqandī らである⁽³³⁾。イブン・ハフィーフ・アル＝サマルカンディーは最後の弓のイマームとみなされることが多い人物で、ヒジュラ暦3世紀、西暦9世紀のバグダードに生まれた。彼の父は王族の出自であり、第16代カリフ・ムータディド al-Mu'taḍid (在位892-902年)の侍従であった。彼自身もこのカリフから偉大なる射手であると認められたという。これは弓術以外の分野でも同様に言えることではあるが、フルーシーヤの基礎を確立し、マニュアルを記したのは当然ながら、高位にして教養のある知識人たちであった。アッバース朝という王朝の特性としても考えることができるのかもしれないが、先述の帝王学的なフルーシーヤという概念が最も影響しているのが、この時代であると考え。その後の変遷を概観すれば、次第に個々の技術という以上に体系的な訓練が可能になる槍訓練が好まれるようになる傾向が見受けられる。

アッバース朝初期における一般的な軍隊構成は、ホラーサーン軍を中核に、重騎兵、重歩兵、弓兵の連帯が脇を固める、というものであった。この時の弓兵は歩兵であったとされる。また、ビザンツの史料に「エチオピアの射手」と残されているものは、ヌビアやスーダンの弓兵だと考えられており、キルトの防具を身につけていたとされる。彼等が使用していたのは複合弓ではなく、シンプルで伝統的な単弓であった⁽³⁴⁾。この頃のアラブの単弓は通常1メートル50センチほどのやや大ぶりなものであった。一方、トルコ兵等が使用する複合弓は約90センチと、単弓に比べて小型であり、馬上からの射撃を有利なものとしていた。初期アッバース朝の弓兵が歩兵であったのは、長い単弓を使用していたからであると考えられる。彼等歩兵の射手達は、長途の遠征の際にはラクダや馬を連れていくこともあったが、通常近距離の移動は騎士の後部に添え鞍を装着して便乗していた。また、物資と攻城具の輸送もラクダにて行っていたので、軍全体が非常に短い時間での長距離移動が可能であった。この機動力こそがイスラーム軍の強みであったのである⁽³⁵⁾。

複合弓の普及以降、弓兵は騎兵になり、弓兵歩兵の担っていた持ち場は次第に槍兵に取って代わるようになる。フルーシーヤが発生したのは、まさにこの過渡期にあたり、騎馬のまま射撃を可能にする複合弓を手し、先述のギルマーン騎士やマムルーク騎士が主力として台頭してきた時代であった。彼等の特色は、接近戦の武器も携帯し、またその技術があったことである。旧来の射手は、単弓によって一定の距離から射かけるのが役割であった。そのため、歩兵として主要戦力の騎兵の援護射撃にあたるが多かったのである。しかし、複合弓は騎馬のまま射撃できるため、騎兵としての役割も担うことが可能であった。一般的にはジャヴェリン（投げ槍）を携帯することが多かったとされるが、剣や小型の斧、メイス（鎚矛）なども使われたという。いずれにせよ、8世紀から10世紀にかけて、弓術がより騎士と関係深くなり、フルーシーヤの分野として訓練されるようになるのは、このような時代背景と無縁ではないのである。

先述の弓のイマーム達の中には、自らの弓術学校を設立する者も現れた。すなわち、アル＝バーワルディー、アル＝バルヒー、アル＝ラッファーである。彼等は総じて「偉大にして真の弓の達人 a'immat al-ramy al-kibār」と呼ばれ、その後の弓術の流れに大きな影響を与えた人物である。アッバース朝時代に戦役に使用される弓の大規模な産地として知られていたのはダマスクスであるが、弓には三つの規格サイズがあり、それに則って生産されていたようである。そのサイズとは長、中、短であり、そのサイズに合わせて適正な構えと、それに見合った射撃方法があると考えられていた。長はアル＝バーワルディーの様式、中はアル＝ラッファーの様式、短はアル＝バルヒーの様式が適当であるとされていたようである⁽³⁶⁾。長弓を用いるアル＝バーワルディーの学校は、ササン朝ペルシアの伝統を継承する、徒歩での弓術を基礎としたものであった。短弓を用いるアル＝バルヒーの学校はアッバース朝のホラサーニー軍における、徒歩と騎馬での弓術を象徴するものであった。その中間にあたる中弓を扱うアル＝ラッファーの学校は、前述の二校より後に設立されたが、その後の弓術の発展に大きな影響を与えた。また、この学校がダマスクスにあったことも、後にこの都市の特産品が戦弓になったことと無縁ではなかった。このように、弓術はフルーシーヤの黎明期に過渡期を迎えていた分野であり、両者は相乗効果で発展したといっても過言ではないだろう。

弓術に関するマニュアルの主な内容とは、弓の種類、紐、矢、指を保護するための親指用の指輪など、道具に関すること、初心者への訓練、弓の磨き方、戦時における心構え、負いやすい傷について、要塞からの射かけについて、などと多岐にわたる。実際に行われていた訓練に関しては、今後マニュアルと同時に、年代記等の史料で確認する作業が必要である。

ポロ

マムルーク朝期において、ポロは最も人気のあるフルーシーヤ訓練のひとつであった。アラビア語ではクラ kura と呼ばれ、槍訓練と同様、競技場で盛んに行われた。ポロはアッバース朝に

において、王のゲームとして王家に独占される傾向にあったが、フルーシーヤ訓練の一項目として騎士の間に浸透すると、軍事訓練や騎士の娯楽として、多くの騎士層に親しまれるようになった。このゲームは、剣術、槍術、弓術の鍛錬に最適とされており、何より人馬一体となるための基本的なトレーニングとしても理想的と考えられていたようである。マムルーク朝ではスルタン自らもポロに興じる姿が記されている。スルタン・アル＝ナーシルは、ナイル河が増水する頃にアミール達を集め、ポロゲームを行ったという⁽³⁷⁾。ポロはまさに乗馬しなければならないフルーシーヤ訓練であった。マムルーク朝後期、フルーシーヤの技術や訓練といったものは知識人が警鐘を鳴らすほど衰退の一途をたどることになるが、他の軍事訓練よりも目に見えて削減されたのがポロであった。

カバクゲーム

カバク qabaq とは単語的にはひょうたんのことである。このゲームがどのようなものであったかはいくつか異なる記述を見つけることが出来る。イブン・タグリービルディーは次のように説明している。金や銀で作られたひょうたんの中に鳩が入れられており、射手は馬上で移動しながらそのひょうたんを射る。もしひょうたんが首尾よく割れ、なかの鳩が飛び出て来たのなら、その射手は名誉のローブを賜り、ひょうたんも褒美として得ることができる、というものである⁽³⁸⁾。このゲームはもっぱらスルタン・パイバルスとスルタン・カラーウーンの治世で盛んに行われたようである。その後は次第に史料に現れる頻度が減り、マムルーク朝の終焉に至るまでには一切の記述が完全に消滅するようである。今までの訓練の変遷を見ても分かるように、フルーシーヤ訓練が隆盛する時代には、様々な訓練が工夫され、頻繁に行われる傾向にあった。しかも、そのムーブメントはスルタンの趣向が大きく影響しており、当時のフルーシーヤ訓練が政治的思惑と無関係でなかったことが分かる。そもそも、フルーシーヤの内容は軍事と直結しており、個々の会得というよりは、体系的な訓練としての要素が強くなったマムルーク朝以降のフルーシーヤ訓練が、時代背景とパワーバランスによってその内容を大きく変えてきたことは想像に難くない。

この他にもフルーシーヤ訓練の項目としては、鎚矛 dabbūs やフェンシング qarḥ al-sayf、レスリング sirāʾ、棍棒 ʿamūd などの専門分野も、必ずしも主流ではないが、一定の言及がなされている。もちろん剣術も重要な分野であったが、やはり槍術と弓術がより体得を求められる分野だったように感ずる。この他に西欧と同様に一人前の騎士のとして必要だと考えられていたものに狩猟とチェスを挙げることができる。中世アラブにはライオン、チーター、ハイエナなどの野獣が生息していた。それらを狩るということは、ゲームであると同時に安全のために必要なことでもあった。*Nihāyat al-Suʿl* にも騎馬のままライオンを狩る方法について章を割いている。しかし、通常の狩猟と言えば危険の多く伴う猛獣狩りではなく、小動物や鳥などをターゲットとした

鷹狩が好まれたようである。ムンキズもその著書『回想録』の第3巻を「狩猟の話」と題し、様々な実体験を記す巻としている。驚くのは狩猟の際に使役する猛禽類の種類の多さである。大鷹 bāz、クーフ隼 shāhin、ハイ隼 bāshiq、セイカー隼 šaqūr、海の隼 al-shawāhin al-baḥrī など、様々な猛禽類が鷹匠によって用意されていたことがわかる⁽³⁹⁾。狩猟もまた、騎馬のまま細かい動作が求められる訓練であり、多くの場合奨励されていた。また、チェス shitrānj も騎士として、賢さと技術力を養うために双六と同様に重要であると考えられていた。その傾向はマムルーク時代において特に顕著になり、城での夜勤や軍事キャンプの際、スルタンのボディーガード達は眠りに落ちないためにクルアーンを読んだり、何か食べたり、チェスに興じたようである⁽⁴⁰⁾。

むすび

フルーシーヤ訓練だけでなく、王朝勢力としても全盛期であったバフリー・マムルーク朝(1250-1390)ののちに立ったブルジー・マムルーク朝(1382-1517)では、フルーシーヤの復興運動がスルタン主導で活発化する。この頃になると、フルーシーヤ訓練自体がすっかりと衰退し、競技場は放棄され、槍や弓のマスターが激減していた。これに危機感を募らせたスルタンが国を挙げての復興運動に乗り出したのである⁽⁴¹⁾。フルーシーヤマニュアルが量産されるようになったのもこの頃であるが、目論見とはずれて、粗悪な亜流品が出回る結果となった。しかしこの復興運動により、騎士達の意識が高まりをみせ、槍や剣へのこだわり、延いては火器に対する蔑視の助長を促すこととなった⁽⁴²⁾。これが火器の扱いを得意とするオスマン・トルコ軍に対し、大敗を期する要因のひとつとなったことは充分考えられることである。このような傾向はフルーシーヤを体現することへの「騎士としての誇り」と考えることができる。

また、アラブ固有の復讐の美德、ムスリムとしての弱者保護の精神、男らしさ、寛恕の心などを尊ぶ気風(フトゥーフ、ムルッフ)、そして何より勇敢さが騎士たちには求められていた。このことから、フルーシーヤから精神的・倫理的要素を排除することは適当でない。しかし、あくまで主眼は馬術・戦闘技術であり、それらを体得することで初めて騎士たりえたのである。身分である西欧の騎士とは異なり、騎馬し、騎馬戦闘技術を有した者を騎士と呼称した中世アラブ・イスラーム社会において、マナーや気風ではなく、極めて実践的な技術体系が重要視されたことは自然なことである。この点において、フルーシーヤは西欧的な騎士道とは一線を画していると論じることができる。

マムルーク朝初期には政権が安定し、多くの競技場が建設されることとなった。フルーシーヤの体系的な訓練を定期的に行うことで、軍力の維持と同様にスルタンの権威を視覚的に誇示する狙いがあった。マフミル行進での槍パフォーマンスは市民に対しても権威づけすることができる機会であり、その従事者には高い地位と褒賞が与えられたのである。ブルジー・マムルーク朝期に入り、目に見えて衰えたフルーシーヤにスルタンが危機感を抱き、復興の動きを見せたことは、

単に軍事的・技術的な要因だけではなく、フルーシーヤが盛んだった頃の王朝の勢いやスルタンの権威復興を狙ったことであった。このようなことから、フルーシーヤは騎士個々の技術や知識を高めるための諸学としての側面と、王朝やスルタンが政権運営のために効果的に利用できた政治的側面を併せ持っていると考えることができる。

今後フルーシーヤを論考するうえで、上述の特性は留意の必要がある。フルーシーヤ・マニュアルの検討から、その技術内容を明確にすると同時に年代記の記述に見られるスルタンとフルーシーヤ訓練の関係を明らかにすることで、中世アラブ・イスラーム社会においてひとつの学問分野として確立していたフルーシーヤ諸学の様相を提示することができる。先述の史料を用いたそれらの検討を目下の課題としたい。

注

- (1) 騎士道とは騎士身分に共通の資質、特徴的な行動や心性の理想像・模範像である。例としては「戦士の能力、豪胆、栄光への渴望、評価への気遣い、名誉心、約束の尊重、気前よさ、武勇、«courtoisie [クルトワジー、宮廷風礼節]»」などである。ジャン・フロリ、新倉俊一訳『中世フランスの騎士』白水社、1998年 p.108.
- (2) F・テシュナーがフトゥーワ Futūwa と騎士 Ritter に関する研究を多く残している。Taeschner, F. *Zünfte und Bruderschaften im Islam : Texte zur Geschichte der Futuwwa*, Zürich, 1979.; al-Sulami, Muḥammad ibn al-Ḥusayn (d.412/1021), *The Book of Sufi Chivalry*, T. B. al-Jarrahī (tr.), London, 1983. ほか。
- (3) 佐藤次高『イスラームの王権と国家』岩波書店、2004年、p.140.
- (4) Poliak, A.N., *Feudalism in Egypt, Syria, Palestine and the Lebanon, 1250-1900*, London, 1939, p.15.
- (5) al-Sarraf, S., "Mamlūk Frūsīyah Literature" *Mamlūk Studies Review*, 8-1. 2004, p.144.
- (6) Ayalon, D., "Notes on the Furūsīyya Exercises and Games in the Mamluk Sultanate", *Studies in Islamic History and Civilization*, vol. IX, 1961, p.37.
- (7) 彼はアブナー Abnā' 直系の家系であった。アブナーという語は本来「子供たち」を意味するが、カリフを護衛するホラーサーン軍の第2世代という意で使われた。
- (8) Ibn al-Nadīm, (d. 385-388/995-998) *The Fihrist of al- Nadīm*, B. Dodge ed., New York, 1970, p.738.
- (9) Ibid. pp.150-151.
- (10) al-Sarraf, "Mamluk Frusiyah Literature", pp.144-146.
- (11) 『新イスラム事典』 p.210a ; *EI*². [s.v. ghulām] (D. Sourdel).
- (12) Nizām al-Mulk, (d. 485/1092) *The book of government or rules for king*, H. Darke(tr.) London, 1960, p.100./ Hillenbrand, C. *The Crusades Islamic Perspective*, New York, 2000. p.442.
- (13) al-Sarraf, "Mamluk Frusiyah Literature", pp.147-148.
- (14) Ibn al-Qayyim al-Jawziyya (d.751/1350) *al-Furūsīya*, Medina, 1990, p.27.
- (15) 佐藤次高『マムルーク 異教の世界からきたイスラムの支配者たち』東京大学出版会、1991年、pp.128-129.
- (16) al-Sarraf, "Mamluk Frusiyah Literature", pp.150-151.
- (17) *EI*². [s.v. Ibn Taghribirdī] (W. Popper).
- (18) Smith, R., *Medieval Muslim Horsemanship*, London, 1979, p.27.
- (19) 今回使用する写本は British Library, MS. 18866 (773/1371).
- (20) マフミルとはラクダの背中に設置された輿を指す。スルタン・バイバルス以降は、スルタンの権威を誇示するものとして、巡礼団とともにマッカへ送られるようになる。中世カイロでは、巡礼団の出発の際に盛大

な巡回行事が行われた。本稿ではその巡回行事をマフミル行進と呼称する。委細については後述。(大塚和夫ほか編『岩波 イスラーム辞典』岩波書店、2002年、p.926.)

- (21) Ayalon, "Notes on the Furūsiyya Exercises", p.46.
- (22) マイダーン maydān は馬場、競技場などといった意味で、軍事訓練にも使用された。本稿では競技場と呼称する。
- (23) Ibn Taghribirdī, *al-Nujūm al-Zāhirah fī Mulūk Miṣr wa-al-Qāhirah*, VII, Cairo, 1963., pp.191-192. / Ayalon, "Notes on the Furūsiyya Exercises", pp.38-9.
- (24) *Nujūm* (C), VII, p.311. / Ayalon "Notes on the Furūsiyya Exercises", p.47.
- (25) 佐藤次高『イスラームの王権と国家』岩波書店、2004年、pp.184-7. 他にもマッカ巡礼保護のために巡礼団を護衛する軍団とその長である「巡礼のアミール amir al-ḥajj」の任命を行ったり、カーバ神殿に奉納する絹製の布（キスワ kiswa）を毎年誂えたり、とマッカ巡礼はスルタンの威光を内外に示すことのできる機会であった。
- (26) 佐藤『イスラームの王権と国家』、pp.49-50.
- (27) Ibn Taghribirdī, *al-Nujūm al-Zāhirah fī Mulūk Miṣr wa-al-Qāhirah*, VII, Popper, W (ed.), 1930, pp.138-140.
- (28) *Nujūm* (P), VII, p.140.
- (29) al-Sarraf, "Mamluk Frusiyah Literature", p.161.
- (30) 複数の材料を張り合わせることで射程と破壊力を向上させた弓のこと。ここでは主に木製の弓に鉄や銅の金属板を張り合わせたものをいう。
- (31) 複合弓と対照的に単一の材料でのみ作られた弓のこと。丸木弓ともいう。
- (32) al-Sarraf, "Mamluk Frusiyah Literature", p.162.
- (33) Ibid. p.162.
- (34) *ET*². [s.v. Archery] (D. Nicolle).
- (35) テレンス・ワイズ『十字軍の軍隊』桂令夫訳、新紀元社、2000年、pp.17-19.
- (36) al-Sarraf, "Mamluk Frusiyah Literature", p.164.
- (37) al-Qalqashandī. Shibāb al-Dīn Abū al-'abbās Aḥmad (d. 821/1418), *Ṣubḥ al-A'shā fī Sinā'a al-Inshā'*, Cairo, 1964. IV, p.47.
- (38) *Nujūm* (C), VIII, p.6. / Ayalon, "Notes on the Furūsiyya Exercises", p.55.
- (39) Usāma ibn Munqidh (d. 584/1188), *Kitāb al-I'tibār*, Hitti (ed.), Princeton Univ. Press, 1930, pp.192-225.
- (40) Ayalon, "Notes on the Furusiyya Exercises", p.57.
- (41) 先述のスルタン・カーンスーフ・アルンガウリーやスルタン・フシュカダム khushkadam（在位1461-67）などが挙げられる。*Nujūm* (P), VII, p.140 ; Ibn Taghribirdī, *Ḥawādith al-Duhūr*, W. Popper (ed.), p.455; Ayalon, D., *Gunpowder and Firearms in the Mamluk Kingdom*, London, 1956. p.53. など。
- (42) Ayalon, *Gunpowder*, pp.58-59.

